

## 名和研二・構造を散歩する

朝倉幸子 TH-1

Illustration: 向井一貞

### ■ 流れにまかせ

駅の改札口で「なわけんジム」のポストに呼び止められた……。と言っても、このジムが構造設計事務所とはねえ、誰にもわからない。つい、ナワケンと親しく呼びたくなる童顔の構造家、名和研二さんはこのネーミングは「流れで決めた……」と言う。構造家になったのも「流れで……」と自然体。建築家・遠藤政樹さんの事務所では意匠設計をしていて、その流れで、池田昌弘さんの構造を手伝ったのが、構造家人生の始まりという。

大学同期でTH-1の監督・渡邊は、「名和さんは自分の世界で生きている感あり」の人で、当時教鞭を執っていた建築家の難波和彦先生の側に「なぜか、いつも立っていた」と証言する。「そおーなんだよ。こちらはバリア張っているのにね、寄って来るヘンな学生だったよ。」と難波先生もおっしゃる。休みになると、中近東ヘインドへと異国を旅し、夏休み明けは一か月も、教室に姿がないこともしばしばだったとか。ナカナカな建築男子だけれど、傍目にはフラフラ若者に見えていたのかも……。

### ■ シェルパなり

現実を知らなすぎましようか、プロジェクトの最初から参加しても、建築家と構造家が同じ立ち位置で仕事をするのは、難しいと思うのは……。

「オソラク今、人気構造家として沢山ある仕事のオファー、その中から仕事を選択するのはどのように?」、「その建築家のつくってきた建物を見て決めるのではなく、まず一緒にやり始める」



と。「そのうちに、その建築に内在する建築家のこだわりが理解できてくる」。

建築家を登山家に例えると、自分は「シェルパ」と言いもする。そうか、それならわかりやすいデス。シェルパの優劣で登山の成功も決まると言いますから。だとしたら、施工者は現地採用のポーターといったところですか?! モチロン、体力と技術力でシェルパを支えますよ。

### ■ ついてくる数学

「先に計算ありの構造計画は、まだできないです。数学から建築へとなるところを、数学は後から付いてくるものと今は捉える。それが「拾う」発想……と。チトわかりにくいので、最近の構造設計で「拾う」ことができたものを挙げてもらう。広島県江田島に建つ「潜水士のためのガラスハウス」(建築設計/中園哲也さん)。敷地の裏の工場脇に廃テトラポットのコンクリート塊が積まれている工場があるのを、建築家が見つけたことに始まる。「地元では、無筋15段土留が普通、こちらは4段有筋です」。なるほど、安全を確保した計算は完璧というわけ。コスト面で、クライアントにも地元にもメリットあり。ガラスのダブルスキンにして、その構造を見せている。強く



凛としたイメージは、旧海軍兵学校につながるような意匠か。「拾う建築」の第一歩は、まわりへの説得から。建築家と並んで仕事をする構造家には、かなりのコミュニケーション力が必要でしょう。

### ■ なわ散歩

「ふらっと10kmくらいは歩いてます」。「哲学的思索を求めて?」、「うーん、まわりを漠然と見ながら歩く感じかなあ」。身体

に取り込まれた風景が設計に生かされていく。

「現場の始めにコンセプトを明快に語って、発生した問題には柔軟に対応してくれる」と、一緒につくったTH-1の坂本監督。

数字で強引に示したりしないから、言葉が心に響く。つまるところ「散歩が趣味」ではなく、「散歩は仕事」。好きな仕事に生きる幸せな構造家は、人の息吹を感じる建築を歩いている。

